

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 高村美也子

論 文 題 目

スワヒリ農村ボンデイ社会におけるココヤシ文化

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	嶋田義仁
委員	名古屋大学教授	山本直人
委員	名古屋大学准教授	佐々木重洋
委員	名古屋大学准教授	東賢太朗
委員	中部大学教授	和崎春日

## 論文審査の結果の要旨

### 「本論文の概要」

本論文は、東アフリカ・タンザニア国のスワヒリ海岸に位置するボンデイ社会のココヤシ文化を、11回22カ月におよぶ現地調査をもとに、その利用方法を中心に総合的に論じ、男女分業や実用的価値経済的価値など、その社会文化的意味と機能をあきらかにした研究である。本論文は、序論、5章と考察からなる。

序論では5亜科183属におよぶヤシ植物の全体像とその多様な利用方法と研究史を概観した後、ココヤシの植物学的特徴とその分布域を論じた。ココヤシは、南北回帰線間の主に熱帯多雨林気候下の島嶼や海岸地域に分布する栽培植物で、起源地とみられる東南アジアが世界生産の70%を占める。タンザニアはアフリカ1位世界10位の東南アジア外の主要生産地に位置する。東アフリカにはインド洋交易を通じて伝来し、その多くはスワヒリ海岸地域で栽培され、19世紀にアラブ、20世紀にドイツのプランテーション農業によって換金作物として広がった。現在でも、ココヤシはタンザニアにおいて柑橘類とならぶ主要換金作物である。

1章では、ボンデイ社会の自然環境、経済、言語文化、宗教文化、および調査村であるムクジ村の概観が示される。やや内陸に位置するボンデイ社会はイスラーム文化であるスワヒリ文化の周辺に位置し、キリスト教やボンデイの伝統宗教文化も存在する。それゆえココヤシ樹液を原料とするヤシ酒文化も維持されている。しかしボンデイ語は国語化したスワヒリ語におされ消滅傾向にある。ムクジ村概観では、生業活動、家族・住文化、宗教文化にわたる日常生活が紹介される。

2-5章が本論文の中心となり、2章でココヤシの植物学的分析と栽培方法、3章でココヤシの葉利用、4章で実利用、5章で樹液利用の詳細が論じられ、同時に、ココヤシ文化における男女分業形態、ココヤシの実用的経済的価値、さらには社会的儀礼的な価値が明らかにされた。

その結果、ココヤシの換金作物としての重要性とともに、加工品が住民の食文化、住文化などの社会生活と宗教生活に深く入り込んだ実用的作物文化であることが明らかにされる。大型複葉は屋根や扉、扉の材料として住文化の中心となる。編まれた葉は籠となる。内果皮が固い丸い実は容器として様々な家事容器となり、繊維の多い外中果皮はタワシや燃料となる。他方、油脂を多く含む胚乳はココナツ・ミルク、ココナツ油として食生活に重要なカロリー源となることが、料理レシピ紹介とともに論じられた。樹液の自然発酵酒であるヤシ酒は、日常飲料として、婚礼や葬儀、季節儀礼に不可欠の儀礼酒として、社会文化宗教生活の基礎となってきた。分業は、男性労働はココヤシの商品化、女性労働は日常生活に必要なココヤシの実用的利用に専門化する傾向があることが明らかにされた。本論文は、食、住、社会、儀礼に及ぶ多面的価値を有するココヤシ文化の解明を通じて、スワヒリ農村の基層文化的地位にあることを明らかにするに至った。

## 論文審査の結果の要旨

### 「本論文の評価」

本論文でまず評価すべきは、ヤシ文化という主題の選択である。なぜなら、5 亜科 183 属におよぶヤシ科植物は熱帯雨林から砂漠地域にまでおよぶ熱帯の多様な生態学的環境下に広く分布する栽培植物であり、人類文化にとって重要な栽培植物だからである。ヤシはまず食文化において重要である。アブラヤシに代表される熱帯雨林地域での植物性オイルの生産、ナツメヤシに代表される砂漠のオアシスでの果実生産、ラフィアヤシやココヤシの樹液によるヤシ酒生産を考慮すると、ヤシ植物は、穀類と根菜類に次ぐ人類の食文化の第三の柱ともいえる。しかしヤシ文化についてはこれまで、その詳細な民族誌的研究が十分おこなわれてきたとは言い難い。ココヤシ文化を論じた本論文は、ココヤシ文化についてのわが国初の民族誌研究として評価しうる。

ココヤシ樹各部の全体にわたる利用法とその社会文化的宗教的意味、男女分業、詳細な経済的実用的価値など、ココヤシ文化を総合的に論じた本論により明らかにされるのは、ココヤシ文化が、熱帯雨林地域住民の、食文化、住文化、社会的文化および宗教文化をささえる複合的な基層文化であることである。食文化では、ココナツ・ミルク、ココナツ・オイル利用による高カロリーな食文化と、樹液利用によるヤシ酒文化の形成が可能になった。住文化では、葉加工による草屋根、塀、扉の材料生産、葉や実の加工による台所容器などの日常用具生産がおこなわれた。社会文化、宗教文化では、ヤシ酒文化が、日常の社交や娯楽の基礎となり、宗教儀礼においては祖霊や自然との共生感覚とコミュニケーションを可能にする媒介手段ともなってきた。

本論文にはココヤシの生産額や栽培面積、生産価格などの数量統計の分析など経済学研究でおこなわれる研究はみられない。しかし、詳細な民族誌的観察により、住民の生計維持機構に深く根を張った複合的で基層的なココヤシ文化の存在とその実用的価値があきらかにされた。実用的価値は経済的価値のひとつであるが、数値化し難く経済分析では無視されがちである。しかしココヤシ文化の丹念な観察は、そのような価値が日常生活の大半を支え、しかもその価値の創出者が女性たちであることを本論文は明らかにした。これは、アジア・アフリカ社会における経済構造と女性の社会経済的役割研究の少なからざる再考を促す理論的貢献である。

本論文には不十分な点もある。男女分業はあるものの、村落・親族レベルでの共同労働や相互扶助など社会関係の分析が不十分であった。スワヒリ文化とバントゥ文化の混交状態の解明の試みも必要だった。複合的なココヤシ文化の深い分析には、分析概念のさらなる洗練が必要だという指摘もあった。

しかし本論文は、タンザニア・ボンデイ社会を事例にしたココヤシ文化の具体的で総合的な観察にもとづく民族誌研究であり、ココヤシ文化、ひいてはヤシ文化の今後の比較研究の基礎となりうる価値も有するとして、審査委員一同博士(文学)申請論文として合格とした。